仏心ある生活を！
さちあ
第5号
発行　黄檗宗青年僧の会『大阪の集い』の有志
教化布教紙研究会
霊亀山　九島禅院
〒550 大阪市西区本田3丁目4－18
TEL 06－582－5772

国債ネズミ講と仏教の教え

無欲な人は詐欺にかからない

この春、『国利民福の会』という新手のネズミ講が問題となり、国会で無限連鎖講防止法が改正されました。ニュース等でご存じな方も多いことと思います。入会希望者は三十万円の国債を買い、会が指定する先輩会員二人に十五万円分ずつ郵送、二人の子会員を勧誘すると、早くて約三週間後には五段階のピラミッドの頂点に立ち、計三百万円の国債を受け取れる仕組みになっているそうです。従来のネズミ講防止法では、取り締まりの対象が、金銭に限定され、国債は対象外になっているのに目をつけた、悪どい脱法行為といえるでしょう。

警視庁の調べによると、ネズミ講防止法が施行された五十四年五月からこれまでに、豊田商事の事件をはじめ、ベルギーダイヤモンドなど、全国で千百六十八件のネズミ講が摘発され、講元など千百九十八人が検挙されたということです。まさに、「浜の真砂は尽きぬとも、世に盗賊の種はつきまじ」と言えるでしょう。

悪質な詐欺師にかかると、たいていの人はだまされてしまいます。その点では被害者に同情すべきでしょうが、いつもこの種の報道に接した時には思うのですが、やはりだまされた人にも責任があるように思えてならないのです。欲が強すぎて詐欺にひっかかったのではないのでしょうか。

仏教では、つねに「少欲知足（しょうよくちそく）」の精神を教えています。欲望を無際限にふくらませてはいけない。足るを知る、これで充分だ、と満足できる精神をもて、と言っています。いつも、ガツガツと欲望をひけらかすのは、畜生であり、餓鬼であると教えているのです。

人間なら、もっと人間らしいゆとりを大事にしたいものです。私たちは、もう一度身のまわりをみまわして、「これで十分だ」という満足感を見つける必要があります。

江戸時代の禅僧に盤珪（ばんけい）禅師がおられます。彼の語録に次のような話が載っています。

盤珪禅師のもとに、在る時、鋳物師の信者が相談にやって来ました。

「自分がつくった鍋や釜は十のうち八つも穴があいていますそれを、自分は無キズだと言って売りつけています。心苦しくてなりません。やはり、わるい

ぐふとく
求不得苦

ことをしているのでしょうか」
「もちろん悪である」と、普通の人なら答えるところですが、さすがに禅僧はちがいます。盤珪禅師は、答える前に鋳物師にむかって質問をされています。
「それは、おまえだけがやっていることか・・・？」
「いいえ、天下の鋳物師はたいてい、そうやっています」
「夜中に売っているのか？」
「いいえ、白昼に売っています」
「じゃあ、まあいいだろう。買うほうだって目があるのだからキズ物を無キズと言って夜中に売るのであれば問題だが、白昼のことであれば、買うほうもキズを見つけたら買わないであろう。あまり心配することはなかろう」
これでは、盤珪禅師、一見してインチキを公認しておられるように思えます。でも、よく考えてみれば、買ったほうだって責任はあるのです。その責任は棚上げにしておいて、売ったほうばかりを一方的に責める。有名ブランドのニセモノを安い値段で買った人は、「安さ」に目をくらまされたわけですが、そのことはすぐに忘れてしまうのです。そんな現代人を、盤珪禅師はたしなめておられるのだと思います。
今の日本を見てみると、「財テク」（財テク）と、分別も地位もあるはずの大きな会社までが株を買いまくり、土地を買いまくっています。金利が低いから貯金をしても仕方がない。株を買うのだ、といって主婦までが株の売買に一喜一憂しています。住んでいる人を追い出すために放火はおろか、殺人までしてしまう地揚屋、その地揚屋に金を出す不動産会社、またその不動産会社に融資する銀行・・・実に嘆かわしいことです。これはもう立派に、仏教でいう「餓鬼道」です。
どうすればいいのでしょうか「少欲知足（欲望を少なくして足るを知ること）」「知足安分（足るを知り、分に安ずる精神）」言うならば、『精神的腹八分目主義』こそ大事なのではないのでしょうか。そうガツガツせずに、もうこれで十分ですと、欲望に限界をつけて、少しはのんびりとやってみませんか・・・。そんなに金を儲けても棺桶の中までしか持ち込めないのです。あの世への金銭の持ち込みは、三途の川（さんずのかわ）の税関で没収されるのですから。
（九島）

禅のことば②
大器晩成

大方無隅。大器晩成。大声希声。大象無形。（大方は隅無し。大器は晩成す。大声は希声なり。大象は無形なり）
「大器晩成」という言葉の出典がこれです。このうえなく大きい四角は、角張って見えない。このうえなく大きい器は、完成するのが遅い。このうえなく大きい声は、聞くことが出来ない。このうえなく大きい形は、見ることが出来ない。という意味です。
例えば、この地球ですが、球ですが、きいので、にしか見えます。これはなにしろ大平面や直線ません。飛行機にでも乗らないかぎり、その丸みが見えません。大きい球というものはそんなものでしょう。
人間もまた一見凡庸そうな人物の方が可能性を秘めています。但し「大器晩成」といっても、努力を惜しんだのでは、未完の大器に終わってしまうかも知れません。
（中川）

JC活動とわたし

日本青年会議所という四十歳までの青年経営者の団体が各地にあります。主にボランティアとしての社会奉仕活動を地域のために、ある時は自治体とも協力、いろいろな事業にも参加しています。
この青年会議所は、結構宗

名僧・高僧チリャリティー墨跡展
主　催：全国青少年教化協議会

日　時：7月28日～8月2日
場　所：天満・松阪屋百貨店

この墨跡展は、仏教各宗派の高僧の書が一同に会する年に一度の展覧会です。売上金は、青少年の教化に使われます。尚、全国青少年教化協議会とは仏教精神で青少年の教化を図っている団体です

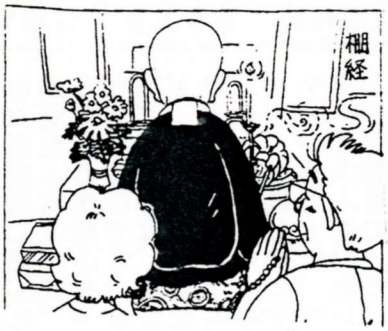
盂蘭盆経とおぼん

目蓮尊者の物語に由来するお盆

お盆の語源は古代インド語のウランバナが中国に伝わり盂蘭盆と音訳され、日本ではお盆と言われています。ウランバナの意味は「倒懸（とうけん）の苦」で、逆さに吊るされたような苦しみを言います。

お盆のいわれについて、盂蘭盆経に次のような逸話があります。目蓮尊者はお釈迦さまの十大弟子の一人で、神通第一と言われていました。ある時、目蓮尊者はその神通力で自分の亡き母を探しますと何と母はわが子を育てるために知らぬまに罪を犯していたのでしょうか。餓鬼道に落ちて、飢えと渇きに苦しんでいました。早速、食物と水を母にさしあげましたが、口に入れる寸前にみな火になってしまいます。目蓮尊者は悲しまれ、お釈迦さまに救いを求められました。

お釈迦さまは、「雨安居（うあんごー雨期の期間、外出せず、互いに切磋琢磨の修行をする期間）の終わる七月十五日に佛道者にお願いし、盂蘭盆の供養をしてもらいなさい。」とお諭しになりました。そして、お諭し通り盂蘭盆の追善供養を懇ろにして母を餓鬼道から救うことができたのです。



この教えが行事となり、インドから中国に伝わり、そして日本では飛鳥時代から、ご先祖の冥福を祈る日として、お盆が行われるようになりました。おもに八月（地域によっては七月）の十三日から十五日の三日間（十六日までの四日間）仏壇やお墓をきれいにし、花やおはぎ・だんご・果物などを供え、菩提寺のご住職に供養していただくのです。

お盆は両親の長養慈愛の恩を振り返る『父の日・母の日』であり、さらに多くのご先祖の恩を考える『祖先の日』なのです。

（佛日）

教関係者が入会しています。僧侶の私も、この数年一緒にやってきました。商売人の団体に何故お寺さんがと思われましょうが、この団体は利害関係を越えて、自己の修練をへて自己啓発し向上を願う青年の集まりなのです。その為に、私ども仏教者の修養や心の教えをものすごく求めているのです。

会員の方たちは、皆企業のトップとして活躍している人達ですが、本業以外にいろいろな人と接し、また修養の場を求めて人一倍努力されています。私もこれまでご一緒させて頂いて、経営者がいかにリーダーとして勉強しなければならないか、多くのことを教えられました。彼らの努力こそが、現在の繁栄日本を支えているのだと痛感しています。

商道に「義（人間としての道）は利の本なり、利は義の和なり」という言葉があります。お釈迦さまは、「人生は苦なり」とおっしゃっています。そして、その苦を脱するために、人間として行うべき八正道（かたよらない、仏道修行のための八つの正しい道）を説かれました。いかに彼らのような青年経済人が仏教に、人としての道を求めているかの現れだと思います。私も僧侶として教えを求められまた学ばせていただき、計りしれないぐらい得るものがありました。

『燈々無尽』行い正しければ、この青年会議所の運動はさらに受け継がれていくことでしょう。

（瑞輪）

黄檗宗の施餓鬼会

施餓鬼会は水陸会、冥陽会施食ともいい、お盆の時期に多く厳修されますが、悪道に落ちて苦しんでいる衆生や餓鬼に施す法要のことで、それ以外の時にもなされます。

この法要の由来は、瑜伽焔口科範（ゆがえんこうかはん）という教典にもとづいています。お釈迦さまの侍者をつとめられた阿難尊者と、飲食を口にしようとすれば焔（ほのお）になる焔口餓鬼（えんくがき）にまつわる話が教典に伝わっています

阿難尊者が、一人で修行しているところへ、あるとき、焔口餓鬼という鬼がやってきました。この鬼の形相はすさまじく、体はやせ衰え、口の中に火が燃え、喉は針鋒のようで頭髪は乱れ爪や牙は長く、恐るべき姿でありました。この鬼が阿難に向かって、汝は三日のうちに命が尽きて餓鬼の中に生まれるであろうと言いました。

これを聞いた阿難は、恐れおののき、どうすればその苦から逃れられるかと鬼に尋ねました。すると、鬼は「汝もし一切の餓鬼に飲食を施しわがために三宝（仏・法・僧）を供養すれば、汝は長寿を得るし、わたしもまた餓鬼の苦しみから免れて、天上に生まれることができるのだ」と答えました。

そこで阿難は、早速、お釈迦さまのもとへ行き、餓鬼に飲食を施す方法をうかがい、実行したために、餓鬼道に落ちる難から救われたということです。

この由来に基づいて、施餓鬼会は広く行われているのです。

俗に成長期に在って、飲食にガツガツしている子供のことを『ガキ』といいますが、飢えの一面をとらえたものです。このように食欲に代表される煩悩（ぼんのうーむさぼり）が満たされない人、もしくはそのような心の状態になった人のことを餓鬼というのです。また、飢渇（きかつ）の苦悩は、何も飲食物だけにかぎってあるのではなく、物心両面の欲求不満の苦悩でもあります。

例えば、食べようとしても焔（ほのお）を発し口にすることができないということは、つまり、手に入りそうで入らないというイライラした心の状態をいっているのです。また自分の欲望を調節することも、乏しさを耐えることもしないで、ただもっと欲しいと望む心の状態も餓鬼といえるでしょう。さらに、物や金、知識や名誉、地位などを必死に追求する人がありますが、これも餓鬼の姿といえます。人間、よりよく生きていくためには、これらも必要かもしれませんが、それだけが、人生の目的ではありません。自分の周囲に悲しんでいる人や苦しんでいる人がいたら、その人たちを慰めたり、励ましたりして、共に明るく生きていけるようにしてあげることが大

黄檗宗山の施餓鬼
―並目度勝会―

（ふとしょうえ）

黄檗山万福寺でも、お盆の行事として施餓鬼が行われます七月十三日から十五日まで三日間お盆行事がおこなわれますが、この三日間、午前中は種々の法要が行われ、一般の迎え火に当たるものとして、夕刻開山隠元禅師の塔前に提灯を棒げ、看塔の拝といって山内僧侶全員が参拝します。大雄宝殿（本堂）堂内に、天井に届くような法座が組まれ、黄檗独特の節経で、歌うが如く、誦まれます。太鼓や木魚、大小引磬で拍子をとり実に荘厳なものです。また、本文にも記したように、開祖隠元禅師いらいから、華僑の人たちの崇拝も集めています。毎年十月中旬には普度勝会といって、純中国式のの施餓鬼が行われます。紙と竹で造られた小さな家がべられ、飾り付けも純中国式に行われ、本堂の前に並がたちこめ、中国線香の煙参拝の華僑の人たちで終日賑わいます。この飾り付け全部が最終日の夜、境内で焼かれますが、読経の声もかき消されるほどにバクチクが鳴り、ドラ等の楽器が打たれ、夜空に火の粉が舞う様子は幻想的なものです。普度勝会は三昼四夜にわたって行われますが、この間に燈籠流しの行事が行われ、燈籠とともに種々の供物も流され、この時もドラ・バクチクの音が響きます。中国での普度勝会は、旧暦のお盆に行われますが、神戸関帝廟が一月おくれ、黄檗山では十月に行われます。なお、その他、純中国式の普度勝会は、長崎でも行われています。これらの寺はいずれも黄檗宗の寺院でもあります

（編集子）

切なのです。たとえば、やさしさや微笑み、温かみ、静かな心で人に接するなどが立派な施しなのです。このような施し、つまり「布施」こそ大切なのです。

「伝道掲示板」

うまれかわり　死にかわり
永遠のいのちのバトンを受けついで
いま　自分の番を生きている
それが　あなたのいのちです
それが　わたしのいのちです

お盆の棚経で、出会ったエピソードである。あるお家に棚経で伺ったときのこと、そのお家の3才になる坊ちゃんが、精霊棚（盆棚ともよび、仏壇の前に棚を設け、ご先祖の戒名の書かれた経木を安置し、お供物をしたお盆の祭壇のこと）を前にして、合掌して拝んでいた。お母さんが言うには「和尚さん、この子はね、胡瓜の馬やなすびの牛にのって、おじいちゃんが帰ってくるよ、と教えたら、それ以来、毎日、ああやって、拝んでいるのですヨ」と。よほど亡くなったおじいちゃんが好きだったとみえ、その姿はほほえましかった。クリスマスにサンタクロースがやって来るのを楽しみに待つ子供たちは多いが、坊やの祈る姿にお盆行事の原点を見る思いがした。

自分の命は当然ながら、両親より受け継いだものである。さらに、自分のこの命も自分の子や孫へと受け継がれていく。このような命の流れを考えるとき、命の不思議さとともに、大切さ、ありがたさを思う。お盆の行事をとおして、この命の大切さを家族みんなで話し合うには、このお盆はいい機会ではなかろうか。（編集子）

中国では、餓鬼をたんに鬼ともいって、死人、あるいは死んでも供養を受けずに祖霊にならない霊魂をさしますが施餓鬼会で、祭壇（餓鬼壇）の正面に「三界万霊有縁無縁諸精霊等位」と書かれた、大きな位牌を祀るのは、有縁仏はもとより餓鬼など無縁仏も供養することを表しています新旧を問わず、有縁無縁や亡くなられた方を供養することにより、その功徳が廻り廻って自らに返ってくるのです。

このようなことも、施餓鬼会を通して学んでいただきたいと思います。

施餓鬼会にご参詣の方にはお分かりだと思いますが、黄檗宗の施餓鬼会は、他の宗派と異なり、非常に特色あるものです。黄檗宗は禅宗の一派ですが、今から三百余年前、中国の明から渡来した隠元禅師によって開かれた宗派です隠元禅師は多くの門弟や文化人を伴って来朝、純中国式の黄檗山万福寺を建立され、日常行事もすべて中国式に行われました。そして三百年来その伝統が受け継がれています

そのため、黄檗宗で使用する教典は明時代のものであり施餓鬼も当時のままです。上下二冊の長い教典で、数時間を要しますが、今日、各地方ではそれぞれ略されて、行われています。勿論、読み方も当時のまま、明音（唐音）で木魚、太鼓などの法具を用いて、独特の節で読まれます。

また、水死者の霊を供養するため、川岸や船を浮かべて法要を営むこともあり、これを「川施餓鬼」といいます。

当院の施餓鬼会もこの川施餓鬼と深い関係があります。当院の開山（寺を開かれた僧）龍渓禅師は寛文十年八月二十三日（一六七〇）、当地を襲った颱風大津波のため、堂宇は覆没。弟子たちの避難を促す声のなか、生死は数なりと遺喝され、水定示寂されました。古人は龍渓禅師を称して「九条の人柱」と言い、その不慮の死を弔い、かつその死を無駄にせぬよう祈ったそうです。

桂離宮や修学院離宮の造営その他で名高い後水尾法皇は龍渓禅師に嗣法（お弟子）されていましたが、禅師の悲報に接せられ、郷土に災害のないよう、五穀豊穣を祈願され併せて禅師の菩提を弔われるため、翌寛文十一年詔され、当院において毎年八月水灯施餓鬼を執行されました。この施餓鬼会は宝永年間（一七〇四～一〇）中断していましたが、享保三年（一七一八）より毎年、八月十七日夜安治川にて川施餓鬼として奉修されていました。その後、場所を当院本堂にかえたものの、現在も当院で厳修されています執行日も戦後、都合で八月十九日に変更されました。なおこの日は後水尾法皇の御祥月命日にあたります。

（九島）

▶玉貫の「龍渓禅師水定図」

読売新聞掲載
昭和63年1月28日朝刊

地蔵盆と子供会

○地蔵盆って何？

数多くの仏さまの中で、お地蔵さまほど人々に親しまれている仏さまはないでしょう。私たちが寝静まっている時も雨や風に耐えながら、じっと街角に立っておられる地蔵さま。私たちが、そっと手をあわせ、心の内をうちあけて見るとき、お地蔵さまのやさしいほほえみがかえってきます。お地蔵さまをはじめ仏さまはいつも私たちを見ていて下さる。あとは私たちが手を合わせる心を持っているかどうかだけなんですね。

お地蔵さまという字を見てみると「大地の蔵」と書いてあります。お供えものの野菜や果物、いろいろなものを生み出す大地。私たちは大地の恵みにより生かされています。みんなお地蔵さまの体内より出てきたものばかりなのです。どうりでお地蔵さまは親しみ深い仏さまだった訳なのですね。

みてござる
いつも　ののさま
　みてござる
かなしいときも
　たのしいときも

○地蔵盆　地蔵盆

京都を中心に関西で広く行われている地蔵盆は、その昔平清盛が京都に入るために通らねばならない六つの道に一つずつお地蔵さまを祀ったことに始まります。

当寺（自敬寺）の地蔵盆は八月二十三日・四日の夜七時から九時の日程で、お勤め・法話・映画（人形劇）をしています。二日間で七～八百人ぐらいの人が、ゆかたを着たり、思い思いの格好で来られます。町中のお地蔵さま巡りをしている元気いっぱいの子供たちも来ます。子供たちのお目当ては、粗供養のお菓子やジュース、それにござに座って見る人形劇やマンガ映画・・・。楽しい一時はすぐに過ぎてしまいます。

（自敬）

編集後記

○今号は『お盆特集号』として、お盆のいろいろな行事や意味について特集しました。

○お盆は、ご先祖より受け継いだ大切な生命を、各家庭のお盆の習わしを通して、家族みんなで考えるにはいい機会です。

○会員各寺はすべて施餓鬼法要を厳修いたしますので、是非、ご参加下さい。詳細は寺の住職にお聞き下さい。

（編集子）

画餅

「人間の好時節」

「季節」という言葉を聞くと思い出す詩がある。禅の語録『無門関』の、「春百花有り秋月有り、夏涼風有り、冬雪有り、若し閑時の心頭に掛かる無くんば、便（すなわ）ち是れ人間の好時節」というものだ。

春には花が乱れ咲き、秋にはきれいな月が輝き、夏には暑さの中にも涼しい風が吹き、冬にはすべてを純白に変える雪がある。もし自分で余計なことを考えなかったなら、一日たりとも自分にとって幸せでない日はない、という意味だろう。

この詩は、私の生き方を反省させてくれる余計なことを考えて、いつも右往左往している自分の姿が見えてくるのである。もっと充実して生きていけないだろうかと思う。

たまたまテレビで星野富弘さんのことを知ったのは、そんな時だった。星野さんの生き方は、余計なことを考えず「人間の好時節」を生きている姿に思えた。

星野さんは、筆を口にくわえ、絵を描いている人だ。十二年前、中学の体育教師になったばかりの時、ケイツイを損傷し、首から下の自由を失った。

九年間の闘病生活。その時、お母さんに「うるせえ。おれなんかどうなってもいいんだ産んでくれなけりゃよかったんだ」と、どなったこともある。しかし、星野さんは一つのことに目覚めた。

「木は自分で動きまわることができない。神様に与えられた場所で精一杯枝を張り、許された高さまで一所懸命伸びようとしている。そんな木を私は友達のように思っている。」木や花を見つめると、それらは動けない。自分も動けない。そんな同じ立場の中で、星野さんのこざかしい思いを投げやるような啓示がひらめいた。筆を口にくわえ、よだれを流しながら絵を描くことが始まった。

今、星野さんは伝導イスに乗って散歩に出かける。楽しみなのだ。ただ、一ついやなことがあった。でこぼこ道を通ること。そこを通ると、振動が頭まで伝わってくるからだ。

ある人から鈴をもらった。車イスにつけて眺めるだけでよかったが、たまたまいやなでこぼこ道を通った。鈴が「チリーン」鳴ったいい音。もう一度、星野さんはその音色が聞たくて、でこぼこ道を引き返した。「チリーン」「チリーン」。

その音色は星野さんの気持ちに安らぎを与えた。それ以来、星野さんはでこぼこ道が好きになった。そして、「私の行く先にある道のでこぼこを、なるべく迂回せずに進もう」と言う。

「季節」のめぐりには、いい日も悪い日もあるだろう。生きることも同じ。しかし、星野さんには、今はすべての日が「人間の好時節」にちがいないように思う。

散歩している時、私は急に咲いた蓮の花を見つけた。風に吹かれる姿がふと「鈴」に見えた。

（にしかわ　敏）